

港湾めぐり

姫路港③

「工業港で発展、観光港としても成長」
姫路港運協会・水田会長インタビュー

姫路港が今春、開港60周年を迎える。姫路港運協会の水田裕一郎会長（飾磨海運社長、写真）に姫路港の概要や特長のほか、港に関心を持ってもらうために取り組んでいるクルーズ客船誘致などを聞いた。

■LNGやばら貨物多く取り扱い

—— 60周年を迎えた姫路港の概要について。

「姫路港は播磨臨海重工業地帯の物流を支える役割と、広く関西圏の物流の基地としての役割を担っている。その中で大きい存在と言えるのはエネルギー基地だ。関西電力の姫路発電所、大阪ガスの姫路製造所がそれぞれあって、LNG船が年間100隻以上寄港している。関西圏のエネルギー拠点の意味合いも持っている。大阪では、関西電力は堺にLNG基地、大阪ガスは泉北製造所がある。姫路港と堺泉北港が、大阪湾の東西の両拠点で関西圏のエネルギーをまかなっていることになる」

「姫路には鉄鋼メーカーも多い。新日鐵住金広畑製作所、山陽特殊製鋼、合同製鐵、大和工業、JFE条鋼、虹技（旧神戸製鉄所）などがある。ケミカル関係では、ダイセル、日本触媒がある。輸入貨物ではLNGをはじめ鉱石など原料が多く、輸出貨物は完成品が輸出されている」

—— 他港と異なる特長は。

「姫路港の特長として、ばら貨物の取り扱いが多いことが挙げられる。大阪港や神戸港では取り扱いが少ないようなばら貨物を扱っている。輸入貨物では、鉛鉱石、

ウッドチップ、珪砂、PKS（パームヤシ殻）などだ。バイオマス関係は増えている。最近では貨物のコンテナ化が進んでいたり、ばら貨物が粉じんを伴うものもあるため、ばら貨物を扱いにくくなっている港もあると聞く。姫路港は神戸港から60～70km離れていて、阪神港との棲み分けでばら貨物を扱ってきた」

—— 港勢拡大にどう取り組むのか。

「姫路港の背後圏の企業の貨物を取り扱うだけでなく、中継基地として選択してもらえるようにすることが重要だと思っている。4万重量トン型のばら積み船も入港できる。貨物は港の倉庫で保管して、他の港にトランシップできればいい」

■姫路経済の4割担う

—— 地元・姫路にとって姫路港の存在はどうか。

「地元経済に大きな役割を果たしている。以前調査したことがあり、姫路市内で1年間行われた経済活動の金額に対して、姫路港の物流企業や姫路港を利用する企業が生み出す金額が38%を占める結果だった。これは、兵庫県、姫路市、姫路商工会議所、姫路港運協会、第3セクターのひょうご埠頭などで構成する姫路港ポートセールス推進協議会のホームページでも紹介している」

「しかし、それだけ貢献している港が市民に認知されていないのが課題だと考えている。地元で港があることの意義が理解されていない。そのために、港でイベントを開催することで、多くの人に港

に足を運んでもらい、船や港に価値を感じるきっかけづくりを行っている。開港



50周年のときから始めた『姫路港ふれあいフェスティバル』を毎年開催している。最初は夏だけだったが、5年前から秋も行うようになっていく。クルーズ客船の誘致もそうした活動の一環だ」

■客船誘致で市民意識向上

—— 客船誘致にどう取り組んできたか。

「15年ほど前から本格的に誘致に取り組んでいる。客船で来た観光客に地元で消費してもらい、姫路港のPRにつなげたい。市民の港に対する意識や理解を深めていく上でも、誘致はいい機会だと思っている」

「これまでも“クリッパー・オデッセイ”“オイローバ”“スプリット・オブ・オセアヌス”“ル・ソレアル”といった小型高級船が多かった。“にっぽん丸”で姫路港発着クルーズを行ったこともあった」

「今年は開港60周年ということで、3月28日に“飛鳥II”が入港するのを皮切りに、4月5日に10万総トン超の“ダイヤモンド・プリンセス”も寄港する。この寄港は大きな意味があり、姫路港がそういう大型船も入ることができる港というのを知ってほしい。大型客船の寄港は港湾荷役への影響もあるので、今後は中小型船の誘致